

令和7年度 第2回熊本市中央区地域包括ケアシステム推進会議 議事録

日 時 : 令和8年(2026年)2月26日(木) 14:00~15:30

場 所 : 熊本市医師会館講堂

参加者 : 委員21名(1名欠席)

1 開会(13:57~)

- ・保健福祉部長挨拶(区長代理)
- ・委員・職員紹介

2 議事(14:04~)

(1) 熊本市地域包括ケアシステム推進会議報告

資料: 令和7年度(2025年度)熊本市地域包括ケアシステム推進会議資料【資料1】

議事録概要(熊本市地域包括ケアシステム推進会議資料)【資料2】

(事務局より報告)

(黒木会長)

私も中央区の代表として参加をさせていただいた。中央区の第2期の方針にも連動している部分がある。はつらつプランについては、第10期のプランの策定に向けて人口構成の変化という部分では、75歳以上から85歳以上に変化していくことや、身寄りのない高齢者問題ということが取り上げられているため、このようなニーズ把握も是非行ってもらいたいと話をした。移動支援についても、平時のみならず災害時の支援について、他区からも心配の声が出ていたため重ねて私からも伝えた。また南区の取り組みの事例報告について、これは各区の取り組みを共有するという初めての試みだった。資料2の議事録にも掲載されているように、救急体制との連携について、資料9の厚生労働省の「在宅医療介護連携推進事業の取り組みについて」というスライド資料を元に質問をした。これは市町村において在宅医療介護連携がどれくらい進んでいるのかという状況を調べた結果。「看取りに関連した取り組み」としては、特に「地域住民への周知啓発」は全国的に進んでいる部分があるようだが、「急変時の対応と連携関連した取り組み」について「看取り実施に向けた救急との体制整備協力関係の構築」が3割程度とあまり進んでないよう。

南区は大変熱心にこれまでも蓄積があるとのことだったので、救急との連携について意見があれば教えていただきたいということで、質問をした。当然今後、看取りという最終のステージに至るまでのプロセスでは、急変時というのがありえるので、その急変時のことも念頭に置いて議論していく必要があると感じた。

今回8020健康づくりの会代表で巻委員からの参加もあったが、ACPの研修と、8020推進員の活動の中で広めていきたいという意見も述べられておられた。簡単に感想や意見な

ど、紹介していただければと思う。

(熊本市 8020 健康づくりの会 巻委員)

8020 健康づくりの会としては、南区の支部長さんからも話があったので、いち早く中央区でも把握すべきだと思い、人生会議とは何だろうという疑問もあり林先生に講演をお願いした。その後のアンケートの中に、かなり具体的なことを質問されている方もおられた。また、何となく分かったが、何となく分からないという意見が多かったため、もう一度 8020 健康づくりの会の本会で講演をと思い、先生のご家族を看取った話などもあったが、8020 推進員として、色々な場所、年齢、抱えた家庭状況等もあるので、それに見合ったような話やお口の話も取り入れてほしいと伝えたところ、あまりにも課題が多過ぎるので少し削ってほしいと言われた。一番大事なことは口から食べることで、生きるということが繋がっている、それに力を入れてお話いただけると思う。先日、東区の方でも人生会議の話があり、皆さん驚いておられ、食生活改善推進員の会長様もとても勉強になったと言われていたので、これは是非皆さんに知っていただきたい。

(黒木会長)

関係の委員の方々も、市全体または区に関わるテーマに関連した各種、知識を共有していただく機会が色々出てくると、政策推進上も非常にプラスに働くと思う。

(2) 中央区の取組報告

資料：令和 7 年度中央区地域包括ケアシステム推進会議（第 2 回）

(事務局より報告)

お互いさまのまちづくり推進事業について。在宅医療介護連携をテーマとして、経年的な取り組みを行っている「ささえりあ子飼」、介護側の視点での問題について取り上げた「ささえりあ帯山」より報告をお願いしたい。

(ささえりあ子飼 田口委員)

令和 7 年度中央区地域包括ケアシステム推進会議（第 2 回）のスライドの 6 にあるように、12 月 11 日に研修会を実施。人生会議がテーマ。「みんなで考えようおひとり暮らしの看取り・尊厳死・地域後見」と題し、5 回目くらいの実施。経年的に行っている。中央公民館に 80 名ほど集まっていた。色々な多職種の方に参加していただき、住民と多職種で議論をしている。人生会議というテーマではあるが、一人暮らしの選択肢について深めていった。人生会議の話の中で色々な選択肢があるが、家族がいて、支援者がいるという前提の話だったりする。中央区全体でも一人暮らしの方や身寄りがない方も多いが、そのような

方はどういう選択肢があるのか、また不足する社会資源があればどのようにしたら作れるのか等、地域でどこまで支えられるのか等について話した。ひまわり在宅クリニックの後藤先生に登壇いただき、一人暮らしで看取った事例を3事例ほど紹介。その時の課題や、一人暮らしの方がこういう感じで自宅で見て最期まで過ごされた、これがしたかったので家に帰られたという内容の話をしていただいた。それが本当に尊厳のある死だったのかということも皆で考えながら、どこまでが尊厳があって、もう医療を諦めるように帰るのはどうなのかという話もあり、また周りが大変になるのではないかという話等。何があったら皆が安心して一人暮らしでも家で死ぬということが選択肢になるのかということを話し合った。実際は、こういうのがあったらいいなで終わってはいるが、それを皆で考える機会となった。

(ささえりあ帯山 芹川委員)

当圏域のお互いさまのまちづくりでは、「地域の絆繋がるプロジェクト」として、これまでは集いの場についてのテーマが中心だったが、本年度からより身近な問題である生活支援を中心として検討。参加された方は、2040年問題における現状やヘルパーが介護保険の中で出来ることの限界というところを確認していきながら、ごみ出しの問題について、高齢者がごみ出しを出来なくなる要因を皆で想像しながら考えた。ごみ出しが出来なくなる要因として、身体的な要因や精神的な要因、環境的要因が挙げられる。それが複雑に絡み合っごみ出しが出来ないという状況が起きる一方で、ヘルパーについても人材不足や、ヘルパーでも出来ないこと、時間の問題等、様々な問題がある。それらを含め、その背景を想像していきながら、実際、地域や個人、行政でごみ出しの問題についてどう解決できるかのアイデア出しをカードワークで実践。この成果がすぐ直結するというわけではないが、校区や自治会単位に下ろしていきながら、一緒に考えていく場づくりに繋がっていければということで、今回企画した。

(黒木会長)

令和7年度中央区地域包括ケアシステム推進会議(第2回)スライドの7について。

お互いさまのまちづくり推進事業自己評価というものがある。前回まではこの枠組み指標はなく、今回新たな試みとして自己評価の評価項目等を設けた。自己評価の項目は①の独自性から⑧の住民主体性まで、8項目。総評にあるような言葉で評価する部分も重要だが、カテゴリー化して評価をしてもらう観点も重要かということで、今回導入。満点は40点。

出典は、厚生労働省の地方部局である九州厚生局。九州厚生局で取り組んでいる事業に、地域共生社会についてユニークな良い取り組みを九州内から集め、特に優れているもの等は表彰しようという事業がある。私は九州厚生局の委員でもあるが、そこで取り入れられている評価項目を今回そのまま参考までに取り入れてみた。こうすることで、ささえりあ圏域ごとの取り組みが、九州内の取り組みというところにも繋がっていくような視点で検討が出来ればいいと思っている。大変素晴らしい取り組みを様々な形で、各ささえりあの中でも

工夫して行っているが、中央区内または熊本市内だけで共有するのはもったいないというところもあり、ぜひ九州内の優れた取り組みとしても紹介していきたい、このような評価指標を取り入れた。今後もしばらくは取り入れてみたい。

(3) 第2期推進方針策定に向けての活動報告

資料：令和7年度中央区地域包括ケアシステム推進会議（第2回）

中央区地域包括ケアシステム推進方針に基づく取組状況【資料4】

第2期中央区地域包括ケアシステム推進方針（案）【資料5】

（事務局より報告）

第2期推進方針策定に向けての活動報告

【令和7年度中央区地域包括ケアシステム推進会議（第2回）スライド11～】

まず、スライド12は第2期推進方針の策定までの流れ。計画期間は令和9年度からの3年間。今年度は素案の提示。来年度、方針を策定。再来年度から本格推進という流れで進めていく。本日は素案を提示させていただく。

（資料5）現方針と第2期の推進方針案を提示しており、変更点は赤字で記載。修正した理由を青字で記載。新たな方針については現方針を大きく変更はしていないが、文言等は計画等に合わせて修正している。まず、資料5の1ページ目。計画期間は先ほど説明したように、令和9年度から令和11年度で、熊本はつらつプランの次期計画期間に合わせて設定をしている。目指す姿は現行と同じく、「～つながって、支えられたり、支えたり～」健康でいきいきとした暮らしを心から喜べる、幸せなまちを目指します。」になっている。今回見直した点としては、まず表現をアップデート。1ページ目、人生100年時代ということを前面に、長寿社会にふさわしい前向きな言い回しで変更。また、2ページ目。基本目標1の部分で、健康まちづくりと介護予防を並列に掲げており、フレイル予防を含む実践をとということ、明確化している。

また2ページ目の（2）暮らしに合った拠点・繋がりづくりということで、活動の場を町内に限定せず多様な選択肢を想定している。また、医療介護専門職に「等」を明記。食改、8020推進員、専門職以外の関与も含む連携を促している。さらに、こども食堂やサロン等の多世代交流という形を明示し、具体的イメージが持てるよう記載。

3ページ目は、多様な高齢者像を想定し、基本目標2の表現を記載の通り変更。次に、4ページ目。連携の拡張と認知症への位置付けの再編ということで、多職種に異業種という言葉を追加。生活支援までを含む多様な主体との連携を明確化。併せて、認知症についてこれまでは基本目標4にあったが、今回基本目標3の中に再配置。認知症本人という言葉遣いで、新しい認知症観に立った、学習、支え合いを中心する構成に改めている。

以上、第2期の推進方針の素になるが、はつらつプランの改定が来年度予定されており、最終的にはその内容に合わせ微調整を図りながら、来年度方針を策定したものを示していきたいと考えている。

次に、ワーキング会議の報告（スライド13～）

次期の重点取り組みについてはワーキング会議の中で整理している。2040年を見据えた課題と、そこから優先する重点取り組みということで4本柱を整理。第3回目、4回目のワーキング会議では、それぞれの4本柱に沿って、具体的に取り組めることについて整理をした。スライド15は、第3回目と4回目のワーキング会議で整理した重点取り組み。また、スライド16が新方針に当てはめて重点取り組みを記載したもの。それぞれ第2期の重点的取り組みは赤字で記載。第2期については、特に短期集中予防サービス修了生の継続支援と活躍の機会の創出。2つ目として、ACPに関連した取り組みの促進。3つ目として、情報発信と多世代交流。4つ目として、認知症を理解し支える体制づくりを重点取り組みとして掲げている。これらの成果を可視化するために、評価指標も設定（スライド17）。第2期全体の中長期的な指標としては、第8次総合計画やはつらつプラン等の上位計画との整合性を図ることとしている。

スライド18以降、第2期の重点取り組みについての補足説明。

まず、スライド18。自立支援重症化予防のための取り組みとして、もともと短期集中予防サービス後の行き場が少ないという課題から、短期集中予防サービスのその後を途切れさせないということで、修了生の継続参加機会を増やしたり、活躍の場を検討している。例えば校区横断的な場づくりや、男性の参加を促進する取り組みを検討している。栄養問題についても、既存の大学や企業との連携を行い、お試しレシピとして資料を掲示したり作ってみてはどうか。また、介護予防サポーターや食改や8020推進員などのボランティアの方の協力も得られないかということで、検討を進めているところ。

次に、スライド19。高齢者の生きがいを創出するための取り組み。ACPや人生会議に関連して、自分ごと化する仕掛けをどうするかということで、多世代が楽しめるようなツールの開発。例えば「中央区版もしばなゲーム」や動画配信などを検討しているところ。対話ツールをどのように研修に広げていくか、中央区には在宅医療の先生もたくさんいらっしゃるということで、在宅医療の先生の協力や、当事者の方、または医療介護専門職の方の活用ができないかということで、現在ワーキング会議ではアイデアがたくさん出ている。

次に、スライド20。地域で支え合う体制を構築するための取り組みとして、既存の繋がる場の可視化と普及、そして多世代交流の拡充創出を検討。既存イベントに大学生などが参加することで情報発信が広がったり、こども食堂を活用する案や情報発信についてもLINEやインスタなどのSNSの活用、また親世代へ届く発信の方法なども検討をしている。

スライド21は、認知症本人家族を見守る体制構築のための取り組みとして、認知症への理解を深めるための機会の充実と認知症カフェの周知を挙げている。学校行事やこども食

堂、通いの場など、親子で参加できる場で広げることが出来ないかということで、検討しているところ。

最後にスライド 22。それぞれの 4 本柱の重点取り組みの中で、検証項目を設けているが、その中で創出ということを掲げている。その創出を評価するための指標として、各圏域のささえりあで自己評価をいただいた 8 つの評価視点も活用できればと考えている。

(4) 意見交換 (14:50～)

(黒木会長)

まず「推進方針の素案」について意見交換に入りたい。

現在、第 2 期推進方針の素案ができているところ。この間も中央区の方針に沿って各団体、ささえりあ、住民の方々もご協力いただいていた。今回は現方針の大きな変更ではなく、法改正などに対応した文言の修正。第 1 期が立ち上がったから大分経つが、この間様々な施策も動いてきており、諸施策との整合性を踏まえていくことになっていると思う。委員の皆様には、各団体の取り組み状況(資料 4)のところで、今後取り組みたいことについても示していただいている。新方針の変更について、委員の皆様の今後の活動について影響などがあるようなら、ご意見を伺いたい。

第 2 期の方針について、まずは焦点を絞ってご意見を伺いたい。

資料 5 にあるように作成の趣旨や、目指す姿、そして期間についてはもちろん修正しているが、基本的な中央区の推進方針に変更はなく、具体的な取り組み方針の基本目標 1「人生 100 年時代」という文言が入ったであるとか、「介護予防」という文言が加わったであるとか、「町内ごとの推進」ということを削除した等、かなりこの間町内ごとのサロンをはじめ進んできているというところも背景にはあると思う。他方で、こども食堂やサロンでの多世代交流などの全世代が集える場所を、もう一度明示的に示したほうがいいのではないかというところだった。そして基本目標 2 に、「自分らしく、過ごそう」というワードが、繋がりを前面に出しながら加わった。そして基本目標 3。田口委員の報告にもあったが看取りの関係でも様々な異業種の方々と交えて取り組まれている研修なども多くなってきており、多職種異業種で力を合わせていこうということで、新たに多様な主体ということが加わっている。大きく枠組みが変わったのは認知症関連のものが基本目標 4 から基本目標 3 に移動。認知症基本法の制定を受けてのもので、新しい認知症観を前面に出している。何かご意見があればお願いしたい。今、素案ということで、このような案をたたき台として今後議論して良いか。

(ささえりあ帯山 芹川委員)

資料 5 の 2 ページ (2) 多様な介護予防の拠点を作るの③『「こども食堂」や「サロン」での多世代交流など全世代で集える場の充実』の部分について。地域の方がサロンを推進してこられた中で、その場を活用して多様な方が参画できるように取り組みをされているよ

うな話も伺っているので、「こども食堂」より「サロン」が前にあった方がいいのではないか。

(黒木会長)

とても大切な意見だと思う。この間も、通いの場づくりにかなり尽力していただけてきたこともあるので、順番を変えて先頭に持ってきてはどうかという提案。

(熊本県介護支援専門員協会 才藤委員)

4 ページの基本目標 3 の (2) の①。新しい認知症観とある。新しい認知症観とはどういうものを言うのか。

(事務局)

新しい認知症観については、認知症の方本人も一緒になって色々なご意見をいただきながら本人の気持ちも尊重しながら入れていくというところで、これまで専門職だけだったのが認知症の方本人と一緒に参画させるというところで認知症基本法が改定。そこから取り込んでいる。

(黒木会長)

2024 年 1 月に認知症基本法が制定され、この新しい認知症観というワードが出てきている。この概念については、本人参画をしっかりとやっていきたいと思います。福祉関係者であれば、前提となるようなところだが、今回それがかなり前面に出てきている。本人参画で地域共生社会の実現を図っていくことを目指していこうという主旨。

(ささえりあ水前寺 永田委員)

ワーキング会議の時、認知症の部分の担当だった。才藤委員が言われた (2) の②「認知症を適切に理解し、支える仕組みづくり」というところに、認知症基本法で本人もだが③で「ご家族」の文言がどこかに足されるといいと思った。

(黒木会長)

もう少し私からの意見を重ねさせていただくと「ご家族等」とさせていただけたりするとよりよいのではないか。今後の人口構造の変化の中で身寄りのない方も増えてくるので、必ずしもご家族だけが認知症に向き合うということになっていかない社会になりそう。地域の方々やご近所の方、民生委員や自治会の方とも、一緒に考えていく場面が増えてくると思う。「ご家族等」を何かしら明文化してはどうか。こちらは一旦意見として拝聴し、検討するというのでよいか？ → (事務局) 今後ご意見を踏まえ検討していきたい。

(黒木会長)

基本的な大きな枠組みについては、頂戴した意見を元に修正・追加等を行い案について検討し、素案として、ご承認いただくということによろしいか。

→（委員賛同）

では、承認いただいたものとして進めていきたい。

第1期の中央区の推進方針は平成29年に策定され、活動を進めてきた。当初から、活動推進しているささえりあには、ワーキングにも参加してもらっており、行政とともに議論してきた意義は大変大きいものだと思っている。このような関係が出来ているということも重要なことだと思う。第2期の推進方針に対しても、一緒に検討を進めていただくということになると思っている。

では、ワーキング会議で検討された第2期の重点的な取り組みについて、意見交換に入りたいと思う。

【令和7年度 中央区地域包括ケアシステム推進会議（第2回）スライド18】

スライド18以降に重点的な取り組みがある。令和9年度からの3年間で取り組んでいく第2期の重点取り組みについて、ワーキングを中心に検討してきたが、今後具体的には関係機関、団体の協力も得ながら活動を推進していくことを想定しているもの。具体的な活動は令和9年度からにはなるが、各委員が所属する団体で、連携が図れそうな取り組み等があれば、意見を伺いたい。

まず1つ目のスライド18にある、短期集中予防サービス修了生の継続支援と活躍の機会の創出について。圏域を越えて、既存の大学や企業の会場などを活用しながら、またボランティアの協力を得ながら展開していく案も出ているよう。栄養改善の取り組みについては、1回目の会議の際にも保健こども課や食生活改善推進員の委員の方々からは、連携の可能性について意見をいただいているところ。

また重点目標の2つ目。ACPに関連して、第1回の会議においてもACPに関しては、地域活動の様々な場面で啓発し、理解を深めていかなければならないという意見も出ている。第1層会議においても市全体で取り組みを進めていくべきだという多くの意見を委員からいただいている。中央区としての課題でもあるが、地域共生社会のあり方検討会議の中でも、人口減少、単身世帯の増加による身寄りのない高齢者への対応など先ほど申し上げた通りだが、身寄りのない方の意思決定支援を含めて、考えていかなければならないと思っている。今回ACPに関連した取り組みとして、多世代が楽しめるようなツールの開発や研修会の開催などを活用して取り組みを拡大していくための様々なアイデアが出ているところ。中央区で活動を広めていくために、どのようなツールがあるとよいだろうか。具体的に展開出来そうかということについて、これまで取り組みを蓄積してきているささえりあ子飼の田口委員から、今後のアイデアなどがあれば紹介いただきたい。

（ささりあ子飼 田口氏）

ワーキング会議の中で、人生会議を知らない方も非常に多かったので、それを啓発するこ

とも大事だが、実際話を聞いたことだけで終わるのではなく、自分ごととして落とし込むときのツールのようなものがあるという話をしていた。その中で、対話カード「もしばなゲーム」がある。誰かと最期のことを話すきっかけになるようなツール、カードゲーム。気軽に出来るようなものを中央区バージョンとして、それを簡略化したものなのか、何か開発できたらいいという話が出ていた。それを他業種の方と一緒にやることで、課題があることを理解いただくことが出来る。また、研修動画は見てすぐ分かりやすいので、メッセージノート等を紹介するようなものがあるといい。さらに、当事者意識が持てるような動画があるといいという話があった。

(黒木会長)

中央区版のもしばなゲームや動画制作等のアイデアが出ている。エンディングノートやACP 自体に繋げていくための取り組みになるかと思うが、他方で今後を見据えていくと、身寄りのない方もおられ、意思表示の支援が課題になってきそう。この辺りについて専門職団体の方々から何か見があれば頂戴したい。

(公益社団法人熊本県看護協会 蓑田委員)

私たちは病院にかかっている方に主に介入しているため、病院で ACP 会議を行うことが多く、その時に色々と意見が出る。「今悪くなった時点でのこの話し合いなのか」という意見がいつも出る。ACP 会議を知るタイミングをもう少し考えていかなければならないのではないかと。先日もあったが、家族の中でいつもそのような会話が出来るような雰囲気が出来るとよいという意見が出た。

身寄りがない方については、やはり私たちやヘルパーなど介入している人たちが日頃の会話の中から感じ取ったり、書きとったり、主治医や民生委員、ケアマネジャーと共有していく上で、「そのようなことを言われていた」と残していくことで最期を見送った人も実際におられる。身寄りがない方について最近困るのは、残った財産や荷物などをどうするか。これから意思決定だけでなく、残ったものをどうするかという問題もある。市が抱えてくれるのか、司法書士や弁護士も必要な場面が出てくるのではないだろうか。最近では経験からそう思う。

(黒木会長)

高齢の方の中には障がいを持った方も当然含まれていて、障がいを持った方たちの親亡き後の問題などもあると思うが、何か感じていることやご意見などがあるか。

(熊本市障がい者相談支援センター 御手洗委員)

日々、障がいのある方の地域での支援等で携わせてもらっている。やはり高齢の方とは違い、障がいの方は母親や家族がいる時は先ほどのようなことを考えなくてもすむのだが、実際に(家族が)病院に入院をして、「もう家に帰れない」、「亡くなってしまった」等とい

う場面で急に本人だけになり、その場面でどうしていきたいかを考えたり、対応を求められることがある。本人の意識や危機感という部分も出てくるかと思うが、理想はそういう状況になる前から考えるというところになると思う。高齢の方もそうかもしれないが、危機感を持ったときでないと考えられなかったりすると思う。具体的に何かこうしたらいいということは出せないが、そういったところは課題があると思っている。

(黒木会長)

2人からそれぞれ意見をいただいたが、ACPについても、今後取り組みを促進していきたいと思っているところ。

2040年を見据えていくと85歳以上の方たちが対象の中心になってくる。そうすると、医療と介護の問題が同時に起こってくる。そこに福祉問題も加わってきそうだと予測される中で、身近な問題として今後も検討していければと考えている。

続いて、スライド20の「既存の多世代でつながる場の普及や、多世代交流の場の拡充や創出について」という重点的な取り組みについて。

白山校区ではこども食堂をきっかけに、地域のこどもたちが集まってくる取り組みが、今度はこどもの親も支援者として協力してくださるようになってきている。また、色々な地域の他団体の方たちもこども食堂に関わるような形で、ある意味こども食堂が起点となって交流できる場として、「地域食堂」のようなこどもに限定しないような形態にもなっているのかと思う。既存の場をより発展させていく1つの事例ではないかと思う。白山校区での様々な取り組みなどを踏まえて、またはお互いさまのまちづくり研修会も今回行われているが、この多世代で繋がる場の普及という点について意見があればお願いしたい。

(ささえりあ天神 宮原委員)

白山校区の社会福祉協議会でこども食堂を始められ何年か経つが、1月は150名を超える参加者があったという話も聞いた。最初はこども食堂として始めた活動の中にこどもの親が参加し始めて、地域の高齢者の方の参加も増えてきた。こども食堂から、地域食堂に徐々に移行しつつあるという話を伺っている。その中で、色々な地域の社協以外の色々な団体からの協力をいただいたり、地域の企業からお肉やお米をもらったりといった繋がりの中で成り立っているという話もあった。今後、会長の展望の1つに、こども食堂の後の時間にコミセンが空いているので、こどもたちが勉強できるような何かが出来たらいいという思いもある。それはささえりあの色々な活動の中の参考になると感じている。サロンにいかにも多世代で、今協力いただいている専門機関以外の色々な地域の方たちの協力をいただくかというのも大きな課題だと思っているので、今取り組まれている白山校区の活動等を参考に、既存のサロンのあり方も考えていきたい。まだ思っている段階ではあるが。

(黒木会長)

中央区内での取り組みではあるが、非常にいい、良く考えさせられるような取り組みが、しかも自然発生的に展開していているというところにも多く私も刺激を受けたところ。こういう地域で支え合うような体制づくり、今後に向けてこういったことを取り組んでいってはどうか、また取り組んでいきたいと考えているというところでも構わない。後程でもまた意見があれば、出していただき共有したい。

続いての重点的取組は、「認知症人と家族を見守る体制構築のための取組」という部分。各団体の取り組みの中でも認知症に関連して理解を深めるための研修会、認知症サポーター養成講座の開催等は、継続的に実施していただいている。在宅介護医療連携の中でも、認知症対応について考えていかなければならないということが含まれている。また認知症の方についてはどの段階でこのACPに繋がっていくのかということにも関わる。

そこで、認知症と家族の会の空閑委員。この種々の問題、政策的な問題が認知症に関わるところに紐づいてくると思う。意見があればお願いしたい。

(公益社団法人 認知症の人と家族の会 熊本県支部 空閑委員)

本人・家族を見守るということの前に、やはり本人・家族も引きこもっているのではなく、仲間づくりをしていただくような気持ちになることが大事ではないかと思っている。私達はそういう方々のために、集いやカフェ等を行っている。一番賑わっているのは、本人・家族の交流の場。そこで一緒に本人ができることに着目して、本人がやりたいことをしていただく。今までは、認知症の方は何もできない人というひとくりだったが、まだまだ出来るものがたくさんあるので、そこを見い出して一緒に何かをするということを目的に開催している。診断されたときには特に落ち込み、何もしたくないと引きこもっている方が多いが、そのような交流会に参加されると、自分たちだけではなくそういう仲間がいるということでもとても元気になっている。また家族同士や本人同士で交流をすることが出来るというのもあるので、そのような交流の場が増えていけばいいと思っている。

(黒木会長)

認知症になるとどうしても引きこもりがちになってしまうというところがあり、地域の方々の理解と協力が大変重要になってくると思っている。そこから孤立感を抱くということに繋がりそう。校区自治会代表では濱会長、託麻原校区ではこの認知症の方の家族の集い等も校区の中で取り組まれている。これまで取り組んできてみて、今後に向けて何かお考えがあれば紹介いただきたい。

(託麻原校区社会福祉協議会会長 濱委員)

私たちは社協で、認知症家族の会という名前を付けて取り組み、20年近くになる。今は認知症の家族の方、認知症の方も連れてこられる方もいるので、3か月に1回開催してい

る。その中で、認知症の方たちもだが家族の方たちの共通な話題がたくさんある。私たちが出来ることと言えば、ただ来られて、自分たちの気持ちを話して気分が良くなり、皆さんたちと話をしてもまた今度会いましょうという形で別れる、というような全く専門的なことでなく、お互いに話し合ひましょう、またこの次来たらこういう話をしましょうという場。人数はたくさん来られるかと思えば、2、3人しか来られないということもあるが、皆さんとても喜んで帰られていると思っている。今度も来月3月の第2水曜日にあるが、ささえりあの方たちが来られ、専門的なこともしっかり話していただくので喜んで帰られる。社協としても、何度かもうやめようかということもあったが、今のところ続けている。

(黒木会長)

関係団体の方たちの取り組みはもちろんだが、校区レベルでの取り組みの中でも認知症の方及び家族の方を囲んで話ができるような場づくりということも、託麻原校区の例などを参考に今後展開していくことが出来ればいいと思う。認知症の人が住み慣れた地域で最後まで生活できるという視点も重要。どのように意向が尊重され医療や介護が提供されていくかという体制整備にも繋がる。議論になりそうなので、この点についてもぜひ皆様方と引き続き検討していきたい。

(公益社団法人熊本県看護協会 蓑田委員)

重点項目の「認知症への理解を深める」と、「地域で支え合う体制を構築する」というのはとてもリンクしていかなければいけないところだと思う。訪問していて、集合住宅のマンションでも隣に住んでいる人を全然知らないという方も多い。先日亡くなった一人暮らしの女性には、夕方から一緒に夕飯を食べに来てくれる若い子がいた。証券会社の騙しではないが、この人の財産は全部その子が持っていったという事例があった。後に弟さんも気付かれたがあまり行き来がなかったため、そういう人が出入りしていたことを知らなかったということがわかった。隣近所に変な人がウロウロしていると発見してくれていたなら、未然に防げた事例ではないかと思う。やはりお互いさまのまちづくりと地域で支え合うということをこれから強化していかななくてはならないのではないかと思った。

(黒木会長)

今日は議論に出なかったが、災害時対応、防犯面の対応等も相互に関連してくると思う。在宅医療介護連携においても災害対応等のことも上がっている。認知症の増加は、今紹介があったような防犯面の対応対策というところも繋がっていくという重要な意見だと思う。

まとめると、中央区では平成29年から現在まで、4つの基本方針をベースに、地域づくりという部分では、プロセスを大事に取り組みを積み重ねてきたところ。その第1期が一区切りつこうとしているところ。今後は2040年に向けて展開していくことになる。地域包括ケアシステムを機能させていくということは、介護予防の取り組みや地域づくりといった

ことを引き続き重点的に取り組みながら、行政、医療介護福祉関係者だけではなく、地域の皆様方、更には異業種の方たちも交えて連携していくことが重要になってくると思う。本会議においても、目指す方向性や課題認識を常に共有して今後も行っていきたい。今回いただいた意見については、すぐ回答できないような内容もあったが、今後継続して検討していきたい。本日は時間が限られている状況だったが、もし他にも意見や要望があれば、後日事務局宛にお寄せいただければと思う。

閉会 (15:29)